

星のない夜を  
君は見つめている

古都まとい Matoi Koto



アルファポリス文庫

## 一章 瑞希

星と海の町と書いて、星海町せいかいちょう。なんにもない田舎にはふさわしくないほど、いい響きの名前だ。

星海町とは名ばかりで、この町は内陸部に存在しているから海は見えない。海が見たいなら、電車で二時間かけて沿岸部まで出る必要がある。その電車も四十分一本あるかどうかといった感じで、交通の便の悪さが田舎であることに拍車をかけている。星は……まあ、見える。田舎特有の少なすぎる街灯のおかげで、そこそこ明るく見える。しかし、キャンプ場で見える星より綺麗かと言われたら、普通だ。街灯の多い都会よりは、はつきり見えるというだけの話。

星と海の町と名づけられたこの町で、一番綺麗なのは意外にも夕日だった。建物を飲み込むほど大きく赤い夕日が、ゆっくりと山並みに消えていく様は、町外からわざわざ写真家がやってきて写真に撮るのもうなずけるほど美しい。たぶん、どこかのカメラマンで写真にでも使われているのだと思う。都会からやってきた美術の先生も言っ

ていた。星海町が一番誇るべきは夕日の美しさだ、と。

美しい夕日とは程遠いさんと降り注ぐ朝日を浴びながら、僕は駅から高校へと続く道をダラダラと歩いていた。

同じ電車に乗ってきた生徒の大半が友達と談笑しながら歩いているなか、僕は一人きりで話す相手もなく、黙々と歩いている。足元だけを見つめて、四月の眩しい日光から目を背ける。

まだ起きてから二時間も経っていないというのに、身体は疲れ切つて重たい。一歩踏み出すごとに、寿命が削られていくようだ。

もちろん、僕が朝から死にかけているのには理由がある。母親のことだ。僕の母親は、目に見えない病気を患っている。

一体いつから病院通いをしているのか、正確なところは覚えていない。僕が小学校へ上がる頃には、すでに母親は薬とともに生活していたように思う。

——瑞希みずきにはね、弟が生まれる予定だったのよ。

母はことあるごとに、この世に生を受ける予定だった弟のことを話した。目の前にいて息をしている僕よりも、生まれてくることができなかつた弟のこのほうが大切

なようだった。

流産で心身の調子を崩した母親を放って、父親は仕事に逃げた。建設会社の社長をしていて、仕事が忙しいということはわかる。けれど、僕が小さい頃には毎日きちんと家に帰ってきていたし、休日も家にいることが多かった。仕事が忙しいというのは、淀んだ家から逃げ出す口実に過ぎない。

夫婦で一緒に背負うはずの痛みを、父は母に押しつけたのだ。なにもかもを押しつけられた母の心が崩壊しないはずがなかった。家族や家庭なんでものが、いとも容易く消し飛ぶことを僕は小学生にして悟った。

今日もいつもと変わらず母より先に起きて二人分の朝食を用意し、母が朝の薬をきちんと飲んだか確認した。確認しなければ、母は飲んだふりをして薬を溜め込む。睡眠薬や安定剤を一気に多量服用すればどうなるか、言わなくてもわかるだろう。

そうして薬を飲んだ母は、毎日きっかり三十分かけて僕がきちんと決められた時間に帰ってくるよう懇願する。父親が家に寄りつかなくなった今、母親にとって僕は最後の砦とりでみたいなものなんだろう。自分の子どもにまで捨てられたら、母はいよいよその命を捨てるかもしれない。

憂鬱ゆううつな朝のルーティンを思い返しながらゆるやかな坂を登りきると、ようやく植え込みの間から高校が見えてきた。

星海町立星海高校。この町に一つしかない高校だ。田舎といえど、いちおう幼稚園、保育園から高校まで揃っている。高校と同じく、それぞれ一つずつしかないけど。

田舎の高校と聞けば、地元の子どもが通うと思われがちだが、そんなことはない。星海高校に通っている生徒の八割は、電車で一時間かけて大都会の幌川市ほろがわかしから通ってきている。

なにを隠そう、星海高校は地域内でもトップレベルに頭の悪い高校だ。入試はいつも定員割れが当たり前、自分の名前を書いたら入学できるとまで言われている。

そんな評判が「勉強嫌いだけど、とりあえず高校までは出なきゃやばい」と思っている人間を呼び寄せ、ますます低レベルに拍車がかかる。授業のレベルは一般的な全日制の高校と変わらない（と思う）が、その分テストの平均点はすごい。二十五点を超えた日には先生が泣いて喜ぶ。

自分で言うのもあれだけど、僕は別にそこまで頭が悪いわけではない。中学の頃はもったいい高校に行けるから考え直せと担任に説得されまくった。

それでも僕が星海高校を選んだ理由は一つだけ。家から近く、母から入学許可を得られた高校が星海高校しかなかったからだ。

僕が都会の高校へ行くことを、母は極端に嫌がった。たかが電車で一時間の距離であったって、母は僕が家から離れることを許さなかったのだ。まるで僕が一度都会に

行ったら、もう二度と家に戻ってこないと信じているみたいに。

そんな不本意な入学をした高校で、僕は二年生に進級した。一週間前に進級に伴うクラス替えがあり、一年かけて築き上げてきた人間関係は瓦解した。すなわち、数少ない友達とは誰一人として同じクラスにならなかつたということだ。

下駄箱の前でのろのろと上履きに履き替え、玄関から一番近い階段を上る。まだ慣れない二年三組の教室へ滑り込む頃には、どつと疲れが噴き出していた。残り約八時二十分を回ろうかというところ、クラスの九割方は席に着いている。残りの何人かが遅刻の常習犯であることを、クラス替えから一週間で知った。

始業式の日から学校内全体が浮き足立っていたような一週間だったが、それも昨日で終わり。進級オリエンテーションや教科書の配付などが済んで、今日からいよいよ新学期の授業がスタートする。

どうか授業中に騒ぎ立てる奴がいませんように。

先生に突つかかって授業を妨害するような奴がいませんように。

学校にいる時くらい、平穩に過ごしたい。

それが僕の、高校生活におけるたつた一つの願いだ。



結論から言うと、二年三組の面々に著しく常軌を逸した、先生に突然殴りかかったりするような人間はいなかった。

一年生の時はそこそこ荒れたクラスにいたため、普通に授業を受けられるというだけで感動してしまう。一年生の時に荒れていた人たちはどこに行ったのか？

二年三組は学年の中でも真面目な人間ばかり集めたのではないかと思うほど、授業中の態度はいい人ばかりだった。

小テストの時間に大音量で動画を観始める奴がいなくてもだいぶありがたい。一年生の頃はそいつのせいでもかなり苦しめられた。

そんな真面目な人間の多い二年三組だからこそ、彼女は僕の目に留まりまくった。

僕の右斜め前の席。否が応でも目に入る。

机の端からこぼれる、さらさらとした黒髪。制服に包まれた、薄くて細い肩。ほっそりとした白いうなじ。

彼女は一時間目から堂々と机に突っ伏して眠っていた。名前を思い出そうとするが、どうにも上手くいかない。

そのうち気づいたのは、彼女の姿を見るのは今日が初めてだということだった。昨日まで、右斜め前の席はずっと空席だったのだ。彼女はオリエンテーションの自己紹

介の時にも、新しい学生証の写真撮影の時にもいなかった。

「——さん。榊さん……榊ゆらさん！」

現代文の先生が教科書を読む手をはたと止めたかと思うと、僕のほうを向いて名前を呼び始めた。

僕の名前じゃない。自分が怒られているような錯覚に陥るが、先生の目当ては僕ではなく、僕の右斜め前に座る彼女だ。

榊ゆら、というのが眠り姫よろしく熟睡中の彼女の名前なのだろう。彼女の自己紹介は聞いていないから、何気に初耳だ。

先生の怒りは頂点に達している。そりゃ、新学期一発目の授業（しかも一時間目）から居眠りをされるのは気分がいいものではない。

たまに生徒が授業中になにをしようが気にしない仙人みたいな先生もいるが、現代文の先生はそういうタイプではなさそうだ。黒板の字は神経質そうで右上がりに尖っているし、前髪をびっちり後ろになで付けたポニーテールはいかにも厳しい女教師という感じで、眼鏡の奥の目は一ミリも笑わずに榊さんの頭頂部を睨んでいる。

先生は教卓に開いたままの教科書を伏せると、つかつかとこちらへ歩み寄ってきた。つられてクラス中の視線が僕の周りに集まる。

注目されているのは僕じゃないのに、どうしようもなく居心地が悪い。

意味もなく肩をすばめて、榊さんの丸まった背中と、パリッとしたスーツに身を包んだ先生を交互に見やる。

「榊さん——」

先生が第二声を放とうとした時、彼女の頭がのっそりと持ち上がった。なぜか皆、息を詰めて彼女——榊さんの動向を見守っている。

丸まっていた背中がまっすぐに伸び、机の上に広がっていた髪がすとんと伸びた背中に落ちた。

そういえば僕はまだ、彼女の顔も知らなければ、声を聞いたこともなかった。新しいクラスになって一週間が経つというのに、である。榊さんについて知っていることといえば、一年生の時は同じクラスではなかったということだけだ。

「授業中は寝る時間じゃないですよ」

先生の当たり前すぎる注意に、誰かがくすくすと忍び笑いを漏らす。

「それに寝ていたら授業の内容もわからないでしょう？ テストの時になって困るのは榊さんで——」

「わかります」

すうっと空気に溶けていくような、やわらかく透き通った声だった。それでいて凛としていて、芯の強さを感じさせる。決して大きな声ではないのに、榊さんの声は

はつきりと僕の耳まで届いた。

榊さんは前を向いたままだから、どんな表情をしているかはわからない。僕は声だけ聞いて、勝手にクール系の美少女を想像する。

先生の顔はわかりやすく引きつっている。そんな先生に追い打ちをかけるように、榊さんは少し頭を揺らしてから言った。

「寝ていても、わかります。テストもできます」

「……馬鹿にしているの？」

「そう思われたなら、すみません。でも、職員室で成績表とか定期考査の結果とか、見てもらったらわかると思います」

榊さんの声は、事実を事実のままに、淡々と告げていた。

なにも臆することなく、いつそ清々しいほどに。

「わたしは一年生の時から、満点しか取ったことないです」

その言葉で完全に先生に火がついた。先生は教室を飛び出していったかと思うと、五月に出す予定だったという小テストのコピーを抱えて戻ってきた。

榊さんの一言により、クラス全員が巻き添えを食らった形で小テストは始まった。

しかも小テストの内容は、あきらかに大学共通テストから抜き出してきたような問題

だった。小テストとかいう規模じゃない。普通に定期考査の一回分と同じ分量がある。

周辺地域でもぶつちぎりの馬鹿高校と名高い星海高校において、予習もなしに共通テストの過去問を解ける人間がどれほどいるだろうか？ いや、予習をしたとしても怪しい。

なんせ星海高校の大学進学率は驚異の四パーセントだ。あとは全員就職か、家事手伝いという名のニートか、よくて専門学校。四大の現役合格を目指す人間など、公園の砂場でダイヤモンドの原石を見つけるようなものである。

僕は小テストを解きながら、本当にこれを五月に出すつもりだったのか怪しく思えてきていた。

いくらなんでも生徒のレベルとかかけ離れすぎている。考えたくはないが、先生は榊さんを打ち負かすためだけに過去問を引つ張り出してきたのではないか？

それに共通テストの過去問なら、授業をきちんと聞いていようがいまいが関係ない。解ける人は解けるし、解けない人は解けない。というかこれが解けるなら、星海高校にいないほうがいい。もっといい高校に行ける。

ガタツと席を立つ音で、僕は読みかけていた文章から目を離した。

小テストが配られてからまだ十分も経っていない。それなのに、榊さんはテストの用紙をひらひらさせながら教卓へ向かっていった。

「もう解けたの？」

疑念の混じった先生の声に、榊さんは「はい」と気のない返事をする。

僕はテストへの解答もそっちのけで、教卓のほうへ顔を向けて固まった。先ほど榊さんが言ったことが本当なら、この小テストでも満点を取っているはずだ。

用紙を受け取った先生の手が空中で止まる。眼鏡の奥の目がめいめいっぱい見開かれ、榊さんが書いた解答を凝視している。

ややしばらくしてから、先生は言いたくないことを言うように唇を噛み締めた。

「……満点よ。席に戻っていいわ」

ざわっと教室の空気が変質する瞬間を、僕は全身で感じ取った。

満点だって？

手元に目を落として問題を見る。僕はまだ問題文の半分も読んでいない。僕が問題文を半分読む間に、榊さんはすべてに目を通して満点の解答を叩き出した。居眠りを注意した先生を、彼女はその力をもって捻り潰してしまったのだ。

榊さんが席に戻るために振り返る。伏せられていた顔が、ゆっくりと持ち上げられる。

「あ……」

ぱっちりとして、目が合った。

猫みたいなアーモンド型の、奥二重と長いまつ毛に縁取られた茶色の瞳が僕を見ている。肌は透き通るほど白く、桜色の花びらのように小さな唇がきゅっと引き結ばれる。

目にかかる前髪を鬱陶しそうに払う彼女の指もまた、小枝のように細くなめらかった。

榊さんはふいと僕から視線を逸らすと、満点のテスト用紙を折り畳みながらひよこひよこ歪な歩き方で自分の席に戻った。

その顔は僕が声を聞いて想像した通り、田舎にいるのはもったいないほどの美少女だった。

驚くことに、榊さんはその日すべての授業で居眠りを続けた。家で一睡もしてこなかったのではと思うほど、いい眠りっぷりである。

それが彼女にとつての普通であるということ、僕は放課後になってから知ったのだった。

「一年生の時、同じクラスだったんだ？」

「うん。同じ三組だったし、出席番号も近かったから」

そう言つて、冴島くんは床を掃く手を止めた。

冴島くんとはたまたま掃除当番で一緒になり、お互い初対面のぎこちなさを漂わせたまま共通の話題を探していたところ、榊さんの話にたどり着いた。

いつの間にか他の当番の人も集まってきて、机を下げた広い教室のど真ん中で顔を突き合わせている。本人不在のなかで話すのは少し気が引けたが、今は榊さんに対する申し訳なさよりも興味のほうが勝っている。

「榊さんって、一年生の時からあんな感じなの？」

気の強そうな女子に質問されて、冴島くんはわずかに身を引いた。心なしか顔が引きつって、眼鏡の奥の目もまったく笑っていない。ほうきの柄を両手でぎゅっと握りしめ、適切な言葉を探るように視線を宙に向けながらうなづく。

「じゅ、授業中に起きてるの、あんまり見たことないかも。学校行事も休んでばかりだし……でも、定期考査は全科目満点で学年一位だって。担任の先生がびっくりしてたから」

羨望とも驚愕ともとれないため息が漏れる。なんとというか……本当に同じ人間なのかすら疑わしい。そんな気持ちだ。

嘆くべきは榊さんが、よりにもよって星海高校の生徒だということだろう。これが都会の進学校の生徒で、授業中に寝ていてもテストで満点を取れて、しかも美人となれば天は二物以上与えたことになる。

しかし星海高校にいる限り、彼女の頭がいいのではなく、学校のテストが簡単すぎるのではないかという疑念がつきまとう。「星海高校の生徒」という肩書きほど、負の名誉はない。あんなに見せびらかしたくない学生証もこの世にはふたつとないだろう。

なぜそんなに頭のいい彼女が馬鹿ばっかりの高校を選んだのか。榊さんならもったいい高校に入れたはず。

そう思いながら、僕は中学の時の担任に同じことを言われたのを思い出した。

——森岡もりおかなら、もったいい高校にだって行けるんだぞ？ 本当に星海でいいのか？  
彼女は入る高校を間違えているなんて、母親に進学先を決められた僕が言えたことではないけれど。



今朝告げた時間通りに帰宅したおかげか、母の機嫌はいつもよりよかった。

夕食中ずっと愚痴を聞き続けてあげたおかげかもしれないし、母の買ってきたシュークリームを人生で一番美味しいものを食ったみたいな顔をして、満腹の腹に詰めたからかもしれない。

とにかく、今日の母親は機嫌がよかった。珍しく、僕の学校生活のことを聞いてくるくらいには。

「どうだったの？ 最初の授業は」

「普通だよ。一年生の時と変わらないかな」

「瑞希は小さい頃から頭がいいものね」

母の何気ない言葉が鉤爪のように心に刺さって抜けなくなる。

中学生の頃の僕にはいちおう、どこの高校に行きたいとか、部活はなにをしたいとか、そんな希望があった。幸いなことに志望校に合格できるくらいのも頭も持っていたけれど僕から希望を奪い、僕が星海町の外へ出ようとしたのを阻止したのは紛れもなく、目の前に座る母親だ。

母親にとつて僕は、母を疎ましく思って家に寄りつかなくなった父親の代わりだった。僕が母を見捨て、この町から出ようとすることは許されない。

僕の「志望高校へ進学する」という中学校三年生なら誰しもが持つ当たり前の夢をへし折っておきながら、母はまるで僕が自分で星海高校への進学を決めたかのような言い方をする。

そういった母の些細な物言いが、僕の心の底に澱がのように溜まっていく。

「僕の頭がいいんじゃないやなくて、学校の授業が簡単すぎるんだよ」

僕は身体の内に渦巻く感情を無視して、話題を変えた。

「そういえば、同じクラスにすごい人がいるんだ」

「すごい人？」

「授業中ずつと居眠りしてるのに、一年生の時から学年一位なんだって」

「元からとっても頭がいい子なのねえ」

母の青白い両手がマグカップを包んでいる。左手の薬指にはめられた、サイズの合わない結婚指輪から僕は目を逸らした。

「どんな子なの？ 一年生の時は同じクラスじゃなかったの？」

「二年生で初めて同じクラスになったよ。榊さんっていう女の子んだけど……」

母の視線が、ふつと遠くなる。

嫌な予感がした。母が僕の話聞いてなにかを思い出す時、たいていらくでもない話に繋がっていく。

まさか、地雷を踏んだか？ 今の話に母が嫌がるような要素はなかったと思うが、もしかしたら女の子の話をするのはよくなかったかも――

「その子、名前はゆらちゃんじゃない？」

「……なんで知ってるの？」

つい非難がましい口調になってしまい、慌てて取り繕う。

「榊さんって、小中の頃はいなかったよね？ いたら絶対一回は同じクラスになってるはずだから」

所詮、星海町は田舎だ。町内で産まれた人間は、幼稚園か保育所から小学校、中学校までずっと一緒に過ごす。荒ぶる少子化の波のせいで一学年の人数も少ないため、九年間も一緒に過ごせば必ず一度は同じクラスになる。

星海高校にも少数ではあるが星海町出身の人もいて、僕の学年では僕を含めて七人ほどが幼稚園からそのまま高校まで同じということになっている。

その七人のなかに、榊ゆらという名前の女の子はいなかった。まして僕が小中学校にいた頃に榊さんが転校してきた記憶もない。都会からの通学組だと思っていたが、どうして母が榊さんの名前を知っているのだろうか？

母は「知らなかったの？」と目を丸くした。

「町内で榊さんっていうえば、線路沿いに住んでる子でしょ？ あの三角の土地に建てる、変なアパートのところ」

「ああ……」

たしかにそのアパートならわかる。通学で毎日のように使う星海駅の線路沿いに建っているアパートのことだ。

外壁が深い緑で塗られ、なぜか建物自体が二等辺三角形のような形をしている。角

の部分が細すぎて、あのなかに部屋があっても誰も住めないのではないかと思いが、通学中に眺めている馴染み深いアパートでもあった。

「でもあそこに住んでるなら小学校で一緒になったはずだよね？」

僕の記憶のなかに、あの三角形アパートに住んでいた同じ学年の人間はいない。いるなら友達になって、角の部分がどうなっているのか見せてもらっているはずだ。星海高校への進学を機に町に引越してきたとか——？

母はマグカップをことりと食卓の上に置くと、こわばった関節を伸ばすように指を広げた。僕の疑問に答えようと、母がためらいがちに口を開く。

「聞いたことない？ 榊さん、小学校も中学校も行ってないって親の間で噂になったことがあるの。兎相の人が来ていたって話もあるし……」

後半は、ほとんど聞こえていなかった。

母の言う「榊さん」は、本当に同じクラスの榊さんのだろうか？



——小学校も中学校も行ってないって親の間で噂になったことあるの。兎相の人が来ていたって話もあるし……

あの話が母の妄想だとは思えない。母は榊さんの名字を聞いただけで、下の名前を当てたのだ。榊さんは僕が知らなかっただけで、保護者たちの間では話題の人物だったということになる。

ただし、星海高校二年三組の榊ゆらと、線路沿いの変な三角形アパートに住んでいる万年不登校だった榊ゆらが本当に同一人物であるかはまだわからない。世の中には同姓同名の人もいるからだ。

なぜだか僕は、母の言う榊さんと高校の榊さんとが別人であればいいなと思ってる。母が児童相談所なんてワードを出したせいかもしれない。

彼女の家、線路沿いに建つ三角形のアパートを思い出す。児童相談所の人間が家に来てきたことまで筒抜けになるのだ。田舎ほどプライバシーが死んでいる環境はない。

家の前にバトカーが停まれば次の日には近所中からなにかあったのかと聞かれるし、隣に住むおばさんはことあるごとに「お父さんの車、最近見ないね？ 家に帰ってないの？」と聞いてくる。余計なお世話。森岡家はとくに父親が行った家として町内で認定されている。

きつと僕以上に、母はその無自覚な悪意に晒されているのだろう。いつそ離婚して、誰も僕たちを知らないところへ引っ越したほうが幸せになれるだろうな、なんて適当

なことを考える。

『森岡さん、二番診察室へどうぞ』

スピーカーから流れるゆつたりとした男性の声で、おもむろに思考が断ち切られた。僕は辺りを見回し、そういえば母の付き添いで病院に来たのだったと思いつく。

隣では母が、膝の上からバッグを下ろして立ち上がるところだった。

「荷物、お願いね」

母はそう言い残して、診察室に消えていく。新学期早々に学校を休むのは気が進まなかったが、母は僕の付き添いなしには病院へ通うこともできないのだから仕方がない。

壁や床、ソファまでが白で統一され、抑えたポリウムでオルゴールのBGMが流れる待合室に一人残される。

精神科の待合室というのは、何度来ても慣れない。見渡す限り白で埋め尽くされた景色はむしろ不安を増幅させるのではないかと思うし、受付の窓には分厚いアクリル板がはめ込まれていて物々しさを感じさせる。

一人で待っている時は特に落ち着かない。待合室には長いソファがいくつも並んでいるのに、座っているのは自分一人だけ。真っ白すぎる光景と、ゆるやかに流れ続けるオルゴールのBGMが一瞬こは天国だったつけ、と錯覚させてくる。

僕は自分の体温で温まった合成皮革のソファの上で、もぞもぞとお尻を動かした。自販機まで行って飲み物でも買ってこようかと思ったが、そのためには母の荷物も一緒に持っていかなければいけない。万が一、母が戻ってきて待合室に置き去りにされた荷物を見たら「中身が盗まれたかもしれない」という強迫観念に三時間は付き合わされることになる。バッグの中身がなにな一手をつけられていなかったとしても、だ。

どうしようかな、と迷っているうちに出入口の自動ドアが音もなく開いた。じろじろ見るのもまずいと思って慌ててソファに座り直し、手元に目を落とす。受付のほうから、ぼそぼそと看護師の話す声が聞こえてくる。

足音が僕の横を通り過ぎ、ソファの軋む音がした。母親はまだ診察室から出てこない。

そつと顔を上げると、前のソファの背もたれからはみ出す小さな肩と丸い頭が見えた。黒い髪はまっすぐ、さらさらとしていて、肩甲骨のあたりまで下りている。髪と同じく黒いパーカーの首元から、白いワイシャツの襟が覗いていた。

珍しい、学校の制服みたいだ。

母に付き添って病院へ来るようになってもう四年は経つが、親に付き添われた私服姿の中学生らしき子を見たことは何度かあつても、制服姿の人を見たのは初めて

だった。

僕と同じ歳くらい、高校生だろうか？ 学校は？ 休みなのか、休んだのか。

制服を見てどこの高校か当てようと思っただけれど、ワイシャツの襟だけではなにもわからない。せめて前から見られたら、校章とかりボンとかもつと情報が増えるはずだけ——

『榊さん、三番診察室へどうぞ』

軽やかな女性の声为天井のスピーカーから流れた。三番診察室の主は女医さんらしい。

待て。今、なんて言った？

制服姿の人影が立ち上がって三番診察室へ向かう。入れ替わりになるように、二番診察室から母親が出てくる。僕は母を見るふりをして、その奥へ首を伸ばした。

右脚を引きずるような、少し歪ひずな歩き方。すらりと鼻筋の通った綺麗な横顔。その顔がなにかを察したかのように振り返り、奥二重に縁取られた目が僕を見やる。間違いない、そこにいたのは同じクラスの榊さんだった。

動揺を悟られないよう、自然なふうを装って視線を逸らす。

なぜ、彼女がここに？ いや、診察を受けるためだろう。ここは病院だ。でもここ、精神科だぞ？

「どうしたの、急にそわそわして」

「あ、いや……」

バッグを取り上げ、僕の隣に腰を下ろした母が顔を覗き込んでくる。「なんでもない」と言いたいところだが、今の僕はどう見たって挙動不審だろう。変に誤魔化して母に機嫌を損ねられても困る。

「さっき三番に入ってしまった人、知り合い？　かもしれないんだ」

結局、あえて濁すような言い方をしてしまう。彼女はどこからどう見ても榊さんだったのだけれど、なんとなく「榊ゆらさんを精神科で目撃した」という事実を認めるのに躊躇した。

まさかこんなところで同じ学校の人と会うことになるなんて思ってもみなかったし、僕が学校を休んで母に付き添っていることをクラスメイトに知られるのも嫌だった。

彼女も精神科にいるところを僕に見られるなんて想定外だっただろう。安心してほしい、学校で言いふらすようなことは絶対にしない。

母は僕の答えにはさほど関心なさそうに、やってきた薬剤師から処方箋の説明を受けていた。

榊さんが診察室から出てくる前にさっさと退散したい。

僕は半ば母親を引き立てるような形で精神科のフロアを抜け出した。



次の日。僕は榊さんの丸まった背中を眺めながら、数学の授業を聞き流していた。彼女は今日も元気に惰眠を貪むさぼっている。もしかすると、夜に眠れなくて授業中に眠る昼夜逆転生活なのかもしれない。いわゆる不眠症というやつで、その治療のために精神科にいたなら昨日あそこで会ったのも納得できる。

でも、昨日病院で会った榊さんはちっとも眠そうではなかった。やはり不眠症とかそんな難しい問題ではなくて、たんに学校の授業がつまらないから寝ているだけなのか？

授業中にこんなことを考えている僕も、たいがい真面目な授業態度とはいえない。別に授業のレベルが低すぎてつまらないとか、そういうことではない。興味が湧かないだけだ。

高校卒業後の進路はどうせ母親が決める。僕を家に縛りつけようとしている人だから、大学に行けとは言わないだろう。たぶん近所で就職しろと言うか、父親の会社に入れと言うかもしれない。

企業の社長だから、そんなに稼ぎはないらしい。最近ずっと家に帰ってきていないから、詳しいことは知らないけど。

前の席から小テストのプリントが回ってきて、僕は一枚を自分の机に置きながら残りを後ろの席へ回した。こっそり榊さんのほうを盗み見る。彼女は先ほどまですやすやと眠っていたのが嘘のように、しゃっきりと背筋を伸ばして座っていた。

「終わった人から昼休みにしていいぞー。あ、白紙提出は受けつけないからな」  
数学の先生が間延びした声でテストの開始を告げた。用紙に目を落とす。授業をきちんと聞いていればわかる問題ばかりだ。十分もかからず終わるだろう。

僕は途中式を書くために広く空けられた白紙のスペースを埋めながら、今日の榊さんは何分で解き終わるのだろうと、そればかり考えていた。

問題文の上を目が滑って、知らず知らずのうちに榊さんの背中を見てしまう。榊さんの席が右斜め前にあるのが悪い。どうしても意識してしまうし、見ずにはいられない。

彼女の背中に意識を奪われながら、なんとか空白を埋めていく。授業内容はあまり頭に残っていないかったが、家でやることなく教科書を読んできたのがよかったのか、比較的すらすら解ける。

僕が最後の問題に取りかかり始めた時——榊さんがギギッと音を立てて椅子を引き、

立ち上がった。手持ち無沙汰に教科書を眺めていた先生に小テストの用紙を渡し、席に戻るのかと思いきや、なにも持たずに教室を出て行った。

僕も駆け足気味に解答欄を埋めて、待ち構えていた先生に提出する。さっき榊さんが出て行ったばかりの教室の出入り口から廊下へ飛び出す。

彼女の足が遅くてよかった。榊さんはまだ十メートルくらい先をふらふらと歩いていて、走らなくても余裕で追いつけそうだ。

なんとなく後をつけているとは思われたくなくて、慎重な足取りで彼女の後ろをそっと歩く。振り返る様子はない。ほとんどのクラスはまだ授業中で、廊下に出ているのは僕と榊さんだけだ。しんと静まり返った廊下に二人分の足音が響く。

榊さんは廊下の端にある階段のところまで来ると、手すりをぎゅっと握って階段を登り始めた。右膝がゆらゆらと揺れて、やけに危なっかしい昇り方だ。こんな尾行みたいなり方で後ろからついていくのは、あまりよくない気がする。

「あの——」

気づくと僕は、彼女の背中に声をかけていた。ちやうど階段の踊り場に差しかけた榊さんが頭を揺らして振り返る。天井に近いところにある窓から正午の日差しが降り注ぎ、彼女の姿を天使か女神のように照らし出していた。

「なに？」

思ったよりもきつい声で尋ねられ、尻込みする。それはそうだ、僕と榊さんの間には二年三組のクラスメイトという以外なにも接点がない。いきなり一度も話したことがない男子に話しかけられて、すぐにこやかに対応してくれるライトノベルのヒロインみたいな女子がいたら知りたい。現実はその甘くない。榊さんが振り返って、僕に興味を持ってくれただけでも満点である。

「いや……」

なんて切り出そう？

ここまで追いかけてきておいて、僕は彼女に対する問いをまったく用意していなかった。昨日、病院にいたことはあまり触れられたくない話題かもしれない。僕だって仲良くもないクラスメイトから突然「お前、昨日精神科にいたよな？」なんて聞かれたらめっちゃくちゃ警戒する。

背後に延びる廊下が急に騒がしくなった。授業が終わり、教室からどつと生徒が溢れ出してきたのだ。

僕は階段の一段目に足をかけたまま、榊さんを見上げた。そもそも彼女は、どこへ向かおうとしているのだろうか？ 購買なら一階だから階段を下りるべきだし、上階には三年生の教室と屋上しかない。

緊張のせいかな、手のひらにじつとりと嫌な汗をかき。今さら、すみません間違えまじたと引き下がる状況ではない。というかそんな勇氣、僕にはない。たかがクラスメイトの女の子に話しかけるだけで精神をすり減らしている自分が情けない。生まれ変わったら、もっとイケメンの明るい人になりたい。

「昨日、市立病院の精神科にいたよね」

ささやかに、僕を突き刺す榊さんの声。まさか向こうから切り出してくるなんて。

僕は彼女を見上げ、ぎこちなくうなずいた。

榊さんが僕に背を向ける。彼女の上履きの底には画鋲が深々と刺さって、光を反射していた。

「話したいことあるなら、来れば」

ひよこひよここと歪な歩き方で榊さんの背中が去っていく。僕は慌てて階段を駆け上がり、彼女の後を追いかけた――

榊さんの目的地は屋上へ続く階段だった。屋上に出る扉はずっと施錠されているため、この階段を利用する人はいない。まったく人気がなく、薄暗い階段に榊さんが腰を下ろす。僕は少し迷ってから、榊さんより二段ほど下のほうへ座った。

遠くから昼休みの生徒たちの喧騒が伝わってくるが、あいかわらず階段付近には人

の気配がない。まるでここだけ学校から切り離されているんじゃないかと思うほど静かで、時間の流れがゆったりと感じられる。

「食べる？」

蛍光灯の明かりも届かない薄闇のなかで榊さんが取り出したのは、ラップに包まれたなにかだった。

なんだ？ よく目をこらすと、赤っぽい色に染まった米粒と豆みたくいものの寄せ集めに見える。一体、どこにこんなものを隠し持っていたのだろう。

断るのもなんだか失礼に思えて、手を伸ばしてラップに包まれた米の塊を受け取る。持ってみると意外と重い。散々食べ物じゃないみたいと言いつた方が、なんてことはない。ラップを剥がすとただの雑穀米のおにぎりだった。

「いつもここで昼ご飯食べてるの？」

「悪い？」

「悪いとは言っていないよ……」

なんで最初から喧嘩腰なんだ、という疑問を飲み込んで、僕はもらったおにぎりにかじりついた。

米の塩気と麦のプチプチとした食感、豆の甘みが一緒くたになって押し寄せてくる。朝握ったものをそのまま持ってきたのか絶妙に冷えていて、なんというか……健康に

はよさそうな味だ。まだ二口しか食べていないのに、無性に白米が恋しい。

しばらく会話らしい会話もなく、黙々とおにぎりを咀嚼する。榊さんがなにを考えているのか、さっぱりわからない。おにぎりをわけてくれる優しさはあるのに、返答は不機嫌そうだし、顔も能面のように感情のゆらぎが見えず、人形と食事をしているような気分になる。

もともと口のなかにまとわりつく雑穀米をなんとか飲み下し、僕は座る向きを変えて、階段の壁に背中を預けた。ちょうど頭のすぐ上に手すりを設置されていて、微妙に邪魔だ。

榊さんもおにぎりを食べ終えて、くしゃくしゃになったラップを手の中で転がしている。お互い、なにをどう切り出せばいいのか様子を窺うことしかできない。

僕が口を開きかけた時、榊さんがふっと顔を上げた。

「家族の付き添い？」

「なんでわかったの？」

「バッグ。隣に置いてあって、人を待つてみたいだったから」

よく見てるな、と素直に感心する。僕の横を通り過ぎたあの一瞬で、全部見ていたのか。

今日の榊さんは制服のワイシャツの上に指定のブレザーを着ていた。胸元で結ばれ

た、赤く細いリボンが榊さんの動きに合わせて揺れる。肩からこぼれ落ちた黒髪を鬱陶しそうに払い、彼女の目が僕の顔をまじまじと見つめる。

僕もそれとなく視線を合わせようとしたが、やめた。榊さんの綺麗に整った顔を見ていると、言葉が喉元で支える。

そもそも女の子と二人きりで話す機会なんてめったにないから、なにを言っているのかわからない。緊張を押し隠すように下を向き、手の中で丸まったラップを眺める。「十年くらい前から、母親の付き添いでよく行ってるんだ」

「長いね」

「もう慣れたよ」

「お母さんに従うことに？」

僕は思わず視線を上げ、榊さんの顔を凝視した。いきなり突っ込んでくるじゃん。

榊さんは最初から変わらない無表情で僕を見ている。僕のテリトリーに土足で踏み込んだことなど、彼女はまるで気にしていない。

思わず、感情の読めない顔から視線を逸らす。

「榊さんには、関係ないでしょ」

「どうかな」

榊さんは僕を軽くあしらうようにくすりと笑った。

初めて見る、彼女のささやかな笑み。いつも笑顔だったら、めちゃくちゃモテそうだな。榊さんくらい美人だったら、もうすでに彼氏の一人や二人くらいいるかもしれない。

邪念が支配しかけた頭を振って、話題を戻す。

「榊さんはいつからあそこに通ってるの？」

「七歳の時から」

またしても僕は、ぎょっとして彼女のほうを向いてしまった。てっきり答えてくれないかと思っていた。僕に母親のことを指摘してきた、ほんの意趣返しのもりだったのに。

榊さんが嘘をついているようにには見えないが、本当のことを言っているのかどうかもよくわからない。それでも、もう何百回と人に説明してきたような慣れた感じがある。

どこかの窓が開いているのか、少し寒いくらいの風が階段を通り抜けていった。

「君は——えっと、名前」

「森岡瑞希」

「森岡くん」

榊さんは手すりを掴んで、「よいしょ」と気合いを入れながら立ち上がった。彼女

が屈んだ拍子にやわらかな毛先が僕の顔の前を掠め、シャンブーのいい匂いがした。大きく伸びをしてからスカートについた埃を手で払うその仕草がどことなくおばさんくさくて、急に都会の洗練された近寄りがない女子高生から、田舎の道の駅で週末に観光大使をやったそうなお当地アイドルくらいの親近感になる。

榊さんは手すりを掴んだまま身を屈めて、座り込む僕に顔を近づけた。

「森岡くんは、わたしと同じ匂いがする」

明かりの乏しい暗い階段の上で、彼女の茶色の瞳がきらめく。さらさらと揺れる髪の毛から絶えずいい匂いがして、心臓がバクバクと暴れ出す。彼女の勝手な同類認定を、僕はこれといった感慨もなく聞いた。

意識は、彼女の口からこぼれる言葉よりも、いい匂いのする髪や、肌荒れの一切ないなめらかな白い頬に向けられていた。

遠くで昼休みの終了を告げるチャイムが鳴る。

僕は彼女が去った後も、しばらく階段から立ち上がることができなかった。

## 一章 ゆら

家族とは、世界のすべてだ。

少なくとも幼いわたしにとってはそうだった。

幼稚園にも保育園にも通っていなかったわたしにとって、家族に拒絶されることはすなわち人との繋がりを完全に絶たれることと同義だった。

血の繋がった父親を求めないこと。

新しい父親を受容し、母親の顔色を窺うこと。

朽ちてゆく弟から、目を逸らすこと。

自分を生かすために、わたしは自分に、まわりに、嘘をついた。

わたしはしあわせです。

お父さんとお母さんはなかよしです。

弟は今度、保育園に入ります。

嘘で固めた泥の城で、わたしは怯えて暮らした。そのうち、誰も助けになど来ない

と悟った。泥の城を壊せるのは、自分しかいなかった。

だから、わたしはやり遂げたのだ。

それがはるか先の未来まで続く、地獄への入口だとも知らずに。

自分の喉から迸<sup>ほとと</sup>つた悲鳴で、目が覚めた。背中にはじつとりと冷や汗をかいていて、薄い布団を湿らせている。

震える両手を目の前にかざす。そこに残ったたしかな感触は、夢を超えて現実に侵食してきている。なにかを訴えるように右膝がじくじくと痛んだ。

わたしは両手をついて、布団から起き上がる。ああ、怠<sup>だる</sup>い。また意味のない朝がやってきた。敷きっぱなしの布団のそばには、空になった錠剤のシートが転がっている。就寝前の菓を飲んで、頓服も飲んだのに得られたものは豊かな睡眠ではなく、身を滅ぼす悪夢だった。

裏手のすぐそばを線路が通っているこのアパートは、始発から終電までの間、かなりうるさい。電車が通るたびに家は揺れるし、壁を突き抜けて部屋中に轟音が響く。終電後じゃないとうるさくて窓も開けられない。

でも、引越せない。わたしは死ぬまでここに住んでいないといけない。

わたしがこの部屋で死んだら、もう二度とこの部屋を借りる人はいないだろうな。大家さんには悪いけど、一人死んだ時点で事故物件なんだから、その後何人死のうが変わらないんじゃない？

バジャマを脱ぎ捨てて、トースターに食パンを二枚入れる。洗面台で顔を洗ってから昨日脱いだまま床に放ってあった制服を着ていると、ちょうどトースターから焼けたパンが飛び出してくるところだった。飲み残しのインスタントコーヒードでパン二枚を流し込む。歯磨きをして、手櫛で適当に髪の毛を整える。

毎朝繰り返される一連の流れ。もしかしたら目をつむっていてもできるかもしれない。動作の一つ一つが身体に染みついている、次はあれをやらうと意識しなくても勝手に手足が動く。

ほとんどのものが入っていないリュックを背負い、リビングを振り返る。リビングと繋がっている和室の奥、畳の上にぼつんと白い骨壺が置かれている。仏壇はない。位牌もない。ただ埋めるのを忘れたかのように、そこに骨壺が置き去りになっているだけ。

「行ってきます」

骨壺に向かって声をかける。返事はない。当たり前だ。もし返事が聞こえたら、入院を勧められるかもしれない。

かかとの潰れたローファーを履きながら、わたしは冷凍庫に残っている冷凍ご飯の数を考えた。そして、ろくに温めてもいない冷凍ご飯をおかずと受け取っていた同じクラスの男の子のことを考えた。

美味しくないならそう言えばいいのに。

## 二章 瑞希

慌ただししかった春が過ぎ、初夏に近い季節がやってきた。六月の空は微妙にぐずついた日が続いていて、ここまでくると雨が降るのか降らないのかどっちかにしてくれ、との外れな怒りを覚える。

母親も外に洗濯ものを干していいものか、毎日たっぷり二時間は悩んで僕に電話をかけまくってくる。心配なら部屋の中に干せばいいのに。その判断も人にしてもらわないと、母は一生洗濯もの前で悩み続けるのだ。最近はどうもうんざりして、雨でも晴れでも部屋の中に干せばいいと言いくるめてから学校に来ている。

そして家で散々神経をすり減らしている僕を悩ませる学校行事が、今月末に行われる。そう、球技大会だ。

自分に運動神経がないことをわかりきっている人間にとって、球技大会ほどつらいものはない。星海高校では「秋にマラソン大会などしようものなら熊に襲われる」という田舎の超現実的な理由で、六月の球技大会が唯一の運動系行事だ。

体育館を丸ごと使って、競技は二日間にあつたて行われる。クラスで話し合っ出て

場する種目を決め、それぞれの種目の勝ち負けでクラスに得点が配分される。総得点が一番多かったクラスが優勝というわけだ。

これから当日までの三週間、バスケットとやバレー部の生徒がもつとも輝く瞬間であり、運動神経のない生徒がもつとも肩身の狭い思いをする。

僕は昨年、自ら志願して男女混合ソフトバレーのチームに入った。ソフトバレーはその名の通り、小学校の授業で使うようなやわらかいビニール製のバレーボールを使って試合をする。運動が苦手な生徒を救済するために設けられた競技であり、主に帰宅部や文化系部活（ただし吹奏楽は除く）の生徒が出場する。

相手も自分と同じくらいのレベルだから、真剣勝負というよりは楽しいレクミたいなものだ。体育会系部活の人間にボコボコにされるより全然いい。

「ソフトバレーチームは冴島賢太郎、森岡瑞希、吉野彩芽、榊ゆら。この四人で決まりでいいな？」

担任の進行に呼応するように、教室のあちこちから同意の声が上がる。皆、たいして話は聞いてないけど。

バスケット所属がバスケットチームに入り、バレー部所属がバレーチーム（本格的なほう）に入り、サッカー部所属が室内への転向を余儀なくされてフットサルチームに入る。

去年とほぼ同じ構成だ。吹奏楽部の仲良し女子二人組がバドミントンのダブルスチームを組むところまで同じ。一年生の時からなにも変わらない。

教壇に近い前の席に座っている冴島くんが振り向いて、通路に顔を出す。僕の顔を見て、冴島くんは小さくガツポーズをした。一緒に頑張ろうってことか。

冴島くんになさき返し、右斜め前の席を見る。あいかわらず、榊さんは夢の中だ。たぶん、自分がソフトバレーのチームに配属されたことすら知らない。あとで帰る前に一声かけたほうがいいだろうか。一応、同じチームになったことだし。

「じゃあ練習は明日から。早く決まったし、もう帰っていいぞー」

待ちかねていたようにガタガタと慌ただしく椅子が動く。たちまち教室内が騒がしくなり、何人かは今決まったばかりのチームで集まり始めている。

榊さんは……まだ寝たままだ。こんなに周りが騒々しいのに、よく寝られるな。

僕も机のなかから教科書類を引き出し、リュックに詰め込んで帰り支度をする。

「あ、あの……」

小さな声が聞こえて、ふと顔を上げる。小動物のようにちんまりとした女の子が、僕の机の前に立っていた。

小さな丸っこい顔に沿うように、ショートカットの髪が揺れている。ぱっちりとした大きな目が心なしかうるんでいて、緊張がこっちにまで伝わってくる。

彼女の胸の前できつく組まれた両手を見ながら、僕はリュックを持ち上げようとしていた手を一旦止めた。

「吉野さん、だよね？」

違ったら怒られると思いつながら、おそろおそろの口にする。彼女がぱっと顔を輝かせ、うなずいた。

正解だったようだ。よかった、全然違う女の子だったらどうしようかと思った。

「運動はあんまり得意じゃないんだけど……よろしくお願いします」

吉野さんがぺこりと頭を下げる。チームメイトになったからとわざわざ挨拶しにきてくれる、礼儀正しい子のようだ。

「大丈夫。僕も運動音痴だし」

はつきりと宣言する。それだけで、吉野さんは少し落ち着いたようににはにかなだ。

絶世の美人というわけではないが、控え目な愛嬌があつて可愛い。つい守つてあげたくなるような、そんな感じ。彩芽という名前によく似合う和風な顔立ち、ショートカットの髪型も相まって座敷童子みたいな雰囲気もある。

断じて悪口ではない。学校の制服よりも、着物が似合いそうだ。

「さっそく練習の話？」

僕が吉野さんを観察しているうちに、すぐそばに冴島くんが寄ってきていた。吉野

さんも彼に気づいて、ぎこちない挨拶を交わしている。

集まってみるとよくわかる。全員紛れもなく文化系もしくは帰宅部のオーラを放っている。二人には申し訳ないけど、僕を含めてとても運動が得意なようには見えない。

「あと一人……」と冴島くんが呟くのに合わせて、僕たちの視線が一斉に同じ方向を向いた。僕の右斜め前の席。榊さんはまだ眠っている。

「榊さんって、運動とかするんですかね……？」

吉野さんがこわごわと疑問を呈する。

「ジャージ着てるの見たことないよね」

冴島くんも吉野さんに同調する。

たしかに、榊さんがジャージで登校しているのを見たことがない。そもそも彼女は体育の授業に参加していたか……？

記憶を探ってみたが、グラウンドにも体育館の景色にも彼女は馴染まない。見学をしていたという記憶もない。

ずん、と空気が一段重くなった気がする。僕たちは早々に榊さんに見切りをつけ、三人で球技大会当日を迎えなければならぬことを悟っていた。

彼女だけが、こちらの気も知らずに眠りこけている。



翌日の体育の授業から、球技大会の練習が始まった。

といつてもどのくらい真剣に練習するかはチームによりけりで、戦術から考える本格派のチームもあれば、練習しなくても勝てると豪語して談笑に興じているチームもある。体育の先生も球技大会までの三週間は生徒の自主性に任せてほとんど口を出してこないため、サボろうと思えばいくらでもサボることができるのだ。

それでも僕たちのチームは、こつこつと形ばかりの練習に打ち込んでいた。はつきり言つて、老人ホームのレクリエーションと変わらないレベルだが。

三人で作った三角形の間をやわらかいビニール製のボールが飛び交う。最初はまったく続かなかつたラリーも、練習開始から一週間が経つた今では二十回くらいは続くようになった。冴島くんも吉野さんも、口で言うよりずっとボールの扱いが上手い。

「そろそろ休憩しない？」

飛んできたボールを手の中に収めながら切り出すと、二人は肩の力を抜いてうなずいた。他のチームの邪魔にならないように体育館の前方まで端を歩いていつて、ステージによじ登る。

ステージの上には何人か、サボりなのか見学なのかわからない集団が輪になって喋つている。僕らはステージの端に腰かけ、練習に打ち込むクラスメイトたちを眺めた。

「榊さん、来ませんね」

隣に座った吉野さんが囁くような声で言う。ショートカットの髪を後ろでちょこんと結び、ジャージの襟から伸びる白い首筋にはうっすらと汗が光っている。吉野さんの隣では冴島くんがTシャツの裾で顔を拭ぬぐっていた。

予想通りの結果ではあったが、榊さんは練習が始まってから一週間、体育館に現れなかつた。というか、球技大会のチームが決まってから、一度も学校にすら来ていない。

ただだんに体調が悪くて休んでいるのか、毎日のようにある球技大会の自主練習を避けた結果、学校を連続欠席することになっているのか、どちらであるのかは榊さん本人にしかわからない。

「このまま来なかつたら、ぼくたち三人で大会に出るってことだよな？」

「まあ、そうするしかないよな……」

「先生に言つて、メンバー補充してもらえたりしないんでしょうか？」

「うーん……でも、チームに入つてない人なんていないし……」

冴島くんの言葉で、また沈黙が下りる。まだ一週間しか経っていないのに、僕らは

誰一人として榊さんが練習に参加することも、大会当日に参加してくれることもないと信じ込んでいる。

非情なようだが、普段の彼女の態度を見ていれば、期待するだけ無駄ということがわかるだろう。授業中に一度だつて起きて先生の話を聞いたことのない榊さんが、球技大会に参加してくれるとは思えなかった。

「相手は四人ですよね？ 一人足りないのに、勝てるわけ……」

吉野さんの懸念や緊張、不安はよくわかる。僕たち運動音痴組がクラスメイトから勝利を期待されているとは思っていない。しかし、なんとか勝つて得点に貢献したい気持ちはあるのだ。

運動音痴ゆえ、クラスメイトの足を引っ張ってきたことへの贖罪しよびらいでも言おうか。「やっぱり負けたんだ」と思われるより、「やればできるじゃん」と思われたい。相手も同じ運動音痴の集まりだからこそ、負けたくない。

でも、一人足りないなら勝利は絶望的だ。ソフトバレーは前衛二人、後衛二人のフォーメーションが基本である。今のところの話し合いでは、前衛を冴島くと吉野さん、後衛を僕一人で担うことになっている。

この二人はなぜか、僕が自分たちよりも運動神経がいいのだと信じて疑っていない。まったくもってそんなことはない。けれど無理だと言うのもなんだか申し訳なくて、

やってやるぜとまでは言わないが、善処しようとは思っている。

全部、榊さんが来てくれたら解決するのにな……

「森岡ー！ ちょっといいか？」

声のしたほうを見ると、担任の長谷川先生が巨体を揺らして体育館の端をちょこまかと走つてくるところだった。ちなみに長谷川先生のあだ名は「横綱」である。本人は大学でラグビーをやっていたと主張しているが、どこからどう見ても相撲部の一員だ。

僕は先生が近づいてくるのを待ちきれず、自分からステージを飛び降りて先生を迎えに行つた。ちょうど体育館の真ん中あたりで向き合う形になる。先生は体育館を二つにわたけるために天井から下がっているネットと壁の隙間を通り抜けることができず、僕に手招きする。僕がネットと壁の隙間をすりと抜けると、先生は踵かかとを返して体育館の外まで出た。

授業中の廊下は静まり返っており、先生の重たい足音が響く。先生は体育館を出て少し歩くと、僕のほうを振り返った。

「悪いな、授業中に」

「いえ……なんの用ですか？」

「ああ、榊のことなんだが」

反射的に身体が強張る。緊張が顔に出ないよう注意しながら、僕は先生に向かつてうなずいた。

「最近ずっと学校に来てないだろ？ プリントも溜まつてるし、家まで様子を見てきてほしいんだ」

「なんで僕が――」

「森岡の家と榊の家が近い。それに、球技大会で同じチームだ。な、俺が行くより森岡が行ったほうがなんとかなりそうだから、頼むよ」

なんとかって、なんだよ……

先生が相手じゃなければ、間違ひなく声に出して言っていた。喉元まで出かけた言葉を飲み下し、「頼んだぞ」と僕の肩を叩いて上機嫌で去っていく先生を見送る。

僕は先生の頼みを断れるほど、強い人間ではない。

プリントを届けに行く。ついでに、どうにかかなりそうだったら球技大会の練習に誘ってみる。

吉野さんも男二人と練習するより、榊さんがいたほうがずっとやりやすいだろう。そうと決まれば、今日の放課後にも行ってみるか。

母の言う榊さんと、僕の知っている二年三組の榊さんは、同一人物だった。知りたくなかったけれど、いずれ知ることになっただろう。その時期が早まったただけだ。

担任の先生が教えてくれた榊さん家の住所は、あの線路沿いに建つ三角形アパートの場所だった。先生が僕の家から近いと言ったこともよくわかる。僕の家は、三角形アパートから歩いて十分もかからない。

僕はプリントの詰め込まれた茶封筒を小脇に抱え、玄関の扉を開けた。榊さんは二〇一号室に住んでいるらしい。榊さんの親が出てきたら、なんて挨拶しよう。

母から余計なことを聞いたせいで、妙に緊張している。

だって、小学校も中学校も不登校だったなんて。それでいて高校では授業中に寝ているのにテストで満点しか取ったことがないという。どんな天才少女だよ？

ぎりぎり人とすれ違えるかどうかの狭い階段を上がる。階段も廊下も薄暗く、本当に人が住んでいるのか怪しいほど静まり返っている。壁や階段は老朽化がひどく、廃墟と言われたほうがまだしっくりくる。

金属製の階段をカンカン鳴らしながら昇りきると、すぐに二〇一号室の扉が目の前に現れた。

インターホンに手を伸ばそうとした時、突如アパート全体がカタカタと揺れ出す。地震かと思っただけ身構えたものの、やってきたのは電車の通り過ぎる轟音と振動だった。線路沿いに建っていることを忘れていた。電車が通るたびにこんなになるさいなら、

家にいたって少しも休まらなさそうだ。

電車が通り過ぎて静かになるのを待ってから、僕はインターホンを押した。ピンポーン、と部屋のなかから間拔けな音が聞こえる。そのあと、床を踏みしめるようなドスドスとした足音が聞こえ、鍵の回る音がして扉が開いた。

「誰？」

扉の隙間からにゅつと顔が飛び出し、ぶつきらぼうな声が投げかけられる。

「森岡、ですけど」

緊張からか、変な応答をする。

すっかりしろ、自分。同い年の女の子の家に来ただけで、なにをビビってるんだ？

榊さんはつい先ほどまで眠っていたような、まどろみと不機嫌を貼りつけた顔で僕のことを睨んだ。長袖の黒いTシャツにハーフパンツという出で立ちで、部屋着のまま出てきたようだ。

「なんの用？」

「担任が、しばらく休んでるし、様子見てこいって」

榊さんの視線が落ちていき、僕が小脇に抱えた茶封筒を見やる。彼女は予想に反して、扉を大きく開けて僕を促した。

「入りなよ」

## 立ち読みサンプル はここまで

榊さんの家には、彼女以外の人の気配がなかった。リビングと二口コンロのキッチンに、和室が一つ。家族で住むには少し狭すぎる気がする。

適当なところに座っていいと言われて、僕はリビングに置かれたダイニングテーブルの椅子に腰を下ろした。榊さんが電気ポットに水道水を勢いよく入れて、電源をつける。

「ご家族は？ 仕事？」

「いない」

ぶくぶくと電気ポットの中身が沸騰する音に合わせて、榊さんの端的な答えが返ってくる。

「いないっていうのは、その……今はってことだよね？」

マグカップを二つ用意していた彼女が、ほんやりと僕を見る。まるで僕の言っていることが理解できないというように、ちょこんと首をかしげる。細くてさらさらした黒髪が肩から落ちて、宙を舞った。

「ずっといないよ」

パチン、と電気ポットの電源が切れる音がある。お湯が沸いたようだ。

いつからいないのか聞いてみたい気もあるが、これ以上は彼女のプライバシーに無